

日本労働者協同組合連合会理事長としての最後のメッセージ

労協連総会まとめ

「抵抗と創造—自治を高める」 一つひとつの取り組みに日一杯の愛情を

永戸祐三理事長

永戸祐三理事長による「総会のまとめ」(大要)です。総会あいさつ、センター事業団総代会でのあいさつの内容も加味しました。

「戦後総決算」の3年間に

「共謀罪法」の本質
「抵抗と創造—自治を高める」が、総会の中心的なテーマだと、私は考えた。

森友学園や加計学園の問題は、政治家が命令し、官僚が加担して、学園の経営者が国家の金を奪い取るという事件だ。こうした不正を覆い隠し、この社会をもっとよくなろうとする運動を取り締まり、多くの国民が刃向かってくるかもしれないことへの対策を様々に打つ。これが「共謀罪法」の本質だと思う。

今、戦後75年を迎える2020年までに、天皇の退位と皇太子の即位、新元号制定、そして憲法の改正を東京オリンピックの狂騒の中で通し切ってしまうという絵柄が、権力の側から出されている。国家主権・国家主義、明治憲法体制への復古

という、憲法規範を覆し社会を破壊する日本会議や安倍政権の野望を、日本の人民がややすと許すとは思えない。しかしそれを許してしまふような土壤が市民の中に存在することも、しっかりと見ておかなければならない。



「まとめ」を行う永戸理事長

「全面的発展への移行期」

今日までの発展の要因
記念誌『ワーカーズコープ35年の軌跡』が出来た。読み返しているが、我々の為してきたことは、一言で現わすと、「学び合い、支え合い、地域で共に発展し、『市民の時代』『地域の時代』を切り拓く」ことだった。

そして、運動・事業の発展の中で、よい仕事を深め、協同労働に行き着いた。協同労働を核とした協同組合は、「人々の生活と地域」を基礎として、自らの存在根拠と役割、任務を規定した。この任務を追い求め続けてきたからこそ、今日までの発展を実現できたのだと思う。

自然のエネルギーに満ち溢れた人たちが、工業国家、工業都市づくりに動員された。そこで生まれた3代目はコンクリートの建物に住み、学校に通つても土壌を踏みしめることはない。この生活が異常でなくて何だろうか。これが本当の国、本当の社会と言えるのか。

無茶々園なくして地域が成り立たないというくらいのところまで来たのだと思う。そうすると、無茶々園の周囲の人たちも、仕事おこしや新しい流れをつくる力を発揮していくことになるだろう。

社会的真の変革者に

単に「働く」ということだけで結ばれている組織ではなく、「自らを社会となす」ような人間関係のある協同組合に自らを育て上げ、そこを核として、地域

人間への信頼の力がらえいく無限の力が生まれる。変革者としての確信の中心に、このことを握らなければいけないのではないかと。人は、孤立するどころ

今、保育士が足りない状況が続いている。その仕事に誇りを持っていないような状況をつくっておいて、給料を1万円、2万円上げるから来なさいと。こんな人間を馬鹿にした話はない。

まず、人間に対する確固たる信頼を持てるかどうか、協同労働運動を展望するときの鍵だ。パネルディスカッションに登壇したはんしんワーカーズコープの馬場君たちの同級生が、はんしんの総会に来て彼らを評し、「悪ガキだったのに、人は変わる、変わるものだと本当に思った」と言っていた。

金にまみれた世界の一方で、人間は自然から切り離された。子どもとときから田植えをし、漁の網を引き、山で木を切る手伝いもした

人間への信頼の力がら、社会を、事態を変成長させる。その営みの中で自らを



名誉理事となり、センター事業団総代会で挨拶する永戸さん

私たちが、事業団とは何か、労協、協同労働の協同組合とは何者か、ということ等を常に自らに問いかけてきた。それは突き詰めていけば、人間とはなにか、労働、仕事をすることとはどういうことなのか、社会とはなにかを問うことでもあった。

そして、20世紀の日本の社会運動は、既存の政治システムや市場経済が膨らんでいくときに社会運動も

東麻布保育園の仲間が発言があった。労働条件がいいわけではない。忙しい。忙しなくても夜の10時までや